



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	幼児期における着脱に関する研究：着脱パターンの解析およびボタンかけと手指の巧緻性の関連性(全文の要約)
Author(s)	高橋,美登梨
Citation	
Issue Date	2018-09-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/150390">http://hdl.handle.net/2309/150390</a>
Publisher	
Rights	

# 幼児期における着脱に関する研究 —着脱パターンの解析およびボタンかけと手指の巧緻性の関連性—

高橋美登梨

基本的な生活習慣は生涯にわたる自立した生活の基本であり、幼児期に家庭保育と集団保育において繰り返し行う中で習得していく。幼児教育に関する 3 法令において、生活習慣は自立心や思考力の芽生えと関わると捉えられており、見通しを持って行動することが生活の自立につながるといえる。生活習慣の中でも着脱は、動作を習得することで着脱を習慣的に行えるようになるため、着脱の自立には動作の習得が重要となる。本研究では、幼児期における着脱動作の特徴から、着脱が育む教育的価値を明らかにするとともに習得段階に応じた衣服の形態と保育者の援助について提言することを目的とした。集団保育の保育者を対象に着脱に対する意識を調査して実態を明らかにした上で（研究 1）、幼児期における着脱の特徴を明らかにするために、動作パターンの解析（研究 2）、習得段階の幼児への援助の観察（研究 3）、ボタンかけと手指の巧緻性の関連の検証（研究 4）を行った。本研究によって得られた知見を以下に示す。

## 研究 1 集団保育の保育者の着脱に対する意識と実態

研究 1 では、集団保育の保育者を対象に質問紙調査を行い、集団保育における衣生活に対する意識や教育的効果等を明らかにして、研究 2 から研究 4 の基礎資料とした。

### ①集団保育における衣生活の実態

着替えをする主な場面は登園、降園、昼寝であり、半数以上の園は日常的に着替えを行う場面があった。園服は主に幼稚園で利用されており、利用率はブラウス、ブレザー等が約 50%、スモック、体操着が約 70%であった。着脱時における保育者の援助の割合は、3 歳児では保育所より幼稚園の方が幼児への援助の割合が高いが、5 歳児では違いが見られなかった。援助の内容より、3 歳児から 5 歳児の間に着脱を習得すると推察される。以上より、集団保育は日常的に着脱行う場であり、着脱の習得には集団保育の中での経験も重要であるといえる。

### ②着脱の習得に対する保育者の意識の検証

基本的な生活習慣の習得に関して、集団保育での援助の必要性に対する意識を幼稚園と保育所の保育者で比較したところ、食事や睡眠に関わる生活習慣に対しては保育所、着脱に関しては幼稚園の保育者の方が援助の必要性を感じていた。着脱は、幼稚園へ入園までの家庭生活において経験が十分ではないと推察される。着脱の習得による教育的効果としては、「自信がつく」、「自立心が芽生える」といった精神面の発達に対する意識が高かった。一方で、衣服による温度調節や生活場面の切り替え、全身運動に対する意識は高くなかった。

### ③手指の巧緻性への意識

幼児の手指の巧緻性の現状に関して、約 60%の保育者が近年の幼児は手指の巧緻性が低下していると回答した。具体的にはボタンのかけはずし等の生活動作に関する回答が最も多く、生活様式の変化により容易な動作で生活を行えるようになったことが一因であると推察される。集団保育の中で手指の巧緻性を向上させるための取り組みを行っているとは約 70%であり、取り組み内容は遊びが中心であった。手指の巧緻性の向上の視点から生活動作を行う機会を設けている園は少ないといえる。

## 研究 2 5 歳児における着脱の動作パターン

研究 2 では、5 歳児における着脱の特徴を動作パターンより捉えた。着脱を習得した段階である 5 歳児（年長クラス）を対象学年とし、園服を利用している幼稚園を対象園とした。対象児は 1 人ずつパーテーションで区切られた空間で体操服（ニット製衣服の上下）の脱衣と制服（ブラウス、ブレザー、スカートまたは半ズボン）への着衣をした。動作の解析には、着脱の様子を正面からビデオカメラで撮影した画像を用いた。

### ①かぶり型ニット製上衣の脱衣方法

動作プロセスは「腕から抜く型」、「裾を持ち上げる型」、「首元から抜く型」の 3 パターンに分類できた。対象児の 80%以上は「腕から抜く型」で脱衣していた。若年女性および高齢者との比較より、かぶり型衣服を腕から脱衣するのは幼児期の特徴であるといえる。

### ②前あき上衣の着衣方法

前あき上衣のはおり方は若年女性と同様に片一方の腕に袖を通してからブラウスを背中にまわし他方の腕を通すプロセスで行っており、5 歳児ではおる動作は習慣化されているといえる。ブラウスのボタンかけでは、ボタンをボタンホールからつまみ出すという習得時に見られる動作パターンも観察され、動作が完成していない幼児もいるといえる。ボタンかけを行う際の手関節の観察を行ったところ、前腕の回旋運動を伴っていたことから、ボタンの操作には手指の巧緻性の発達が影響していると推察される。

### ③下衣の着脱の方法

下衣を脱衣する場合には約 70%、着衣の場合には約 50%が立位で動作を行っていた。全員が立位で着脱を行えるようになるのは小学校入学以降であると推察され、幼児期は座位で衣服の前後や左右を理解して下肢を衣服に通せるようになった後、立位での動作を行う段階であるといえる。

## 研究 3 3 歳児における着脱の特徴

研究 1 で 3 歳児の段階では幼稚園児は保育所に通う幼児より着脱において保育者の援助が必要であり、集団保育の中で着脱を習得すると推察した。研究 3 では、幼稚園に入園直後の園児（年少クラス）を対象に着脱の観察を行い、保育者の援助の内容（「手助け」）および動作パターンから習得段階の動作を捉えた。動作は研究 2 では示した動作パターンを

用いて考察した。観察対象は幼児 20 名と保育者 2 名、観察期間は 9 ヶ月間、観察回数は計 15 回である。通常保育の登園時の着脱場面をビデオカメラ 3 台で撮影した。

#### ①保育者の援助の割合と内容

保育者の援助（手助け）について割合を求めたところ、脱衣、着衣ともに幼児は援助を受けていることが明らかになった。援助の内容をみると、脱衣では主に「腕や頭を抜く」、着衣では「はおらせる」に対して援助が行われており、3 歳児にとっては難しい動作であることが示唆された。

#### ②着脱の動作パターン

脱衣をパターンに分類したところ、ゆとりの少ないかぶり型衣服（ポロシャツ・カットソー）は、研究 2 で観察された「腕から抜く型」が多い一方で複数のパターンを試しながら脱衣する様子も観察された。前あき衣服（カーディガンやブラウス）の脱衣パターンは多岐に渡っていた。脱衣しやすい動作を模索しながら動作を習得するため、さまざまなパターンが出現すると考察される。着衣では、衣服の形態を確認してから「はおる」動作を開始する様子が観察されたことから、動作の習得には形態の理解も必要であると示唆された。

#### ③下衣の着脱

着脱時の体位は、「立位」、「つかまる」、「座位」に分類できた。着衣では観察期間中に「つかまる」から「立位」へ変化する幼児が観察された。5 歳児と比較すると「立位」の割合が低いことから 3 歳児は「座位」から「立位」への移行時期であると推察される。

### 研究 4 着脱と手指の巧緻性の関連

研究 1 と研究 2 より、ボタンかけには手指の巧緻性が影響すると考え、着脱を習得した段階の 5 歳児（年長クラス）を対象にボタンかけと手指の巧緻性の関連を検証した。ボタンかけは所要時間の測定と動作パターンの観察、手指の巧緻性はビーズ通しテスト（60 秒間にビーズを通した個数）とひも結びテスト（10cm のひもをこま結びする所要時間）により測定し、ひも結びは動作パターンの観察を行った。研究 2 と同様にパーテーションで区切られた空間で 1 人ずつボタンかけと手指の巧緻性の測定を行った。ボタンかけには日常の保育で着用している園の指定ブラウスを用いた。

#### ①ボタンかけの特徴

ボタンかけの特徴を所要時間と動作パターンの観察から考察した。ボタンかけの平均所要時間は、個人差が大きく、月齢の影響を受けるものの男女差は認められなかった。ボタンをボタンホールに通す際の左右の手指の動作に着目してパターンの観察したところ、右手で押し通したボタンを左手で受け取る「押し通す型」と左手でボタンホールからボタンをつまみ出す「つまみ出す型」の 2 つに分類できた。所要時間は「つまみ出す型」の方が長かった。

#### ②手指の巧緻性の特徴

手指の巧緻性はビーズ通しとひも結びテストにより測定し、2種のテスト間には比較的強い相関が認められた。ひも結びテストは、先行研究では幼児の手指の巧緻性を測定する項目に用いられていないが、本研究では対象児の生活背景を踏まえて測定項目として採用した。手指の巧緻性を測定した結果、女児のほうが手指の巧緻性が高く、5歳児における手指の巧緻性には男女差があることが示された。ひも結びテストの動作パターンを観察したところ、左右の手の協応が必要な操作プロセスであるひもの「交差部分の固定」および「ひもを（交差部分に）くぐらせる」において操作をスムーズに行えない幼児が約30%いた。

### ③ボタンかけと手指の巧緻性の関連

手指の巧緻性の結果に順位付けを行いボタンかけの所要時間との相関をみたところ、手指の巧緻性が高いほどボタンかけの所要時間が短いことが示唆された。さらに、ボタンかけおよびひも結びの動作パターンの関連を観察したところ、ボタンかけを「つまみ出す型」で操作する幼児はひも結びにおいて左右の手の協応が発達途中であることが観察された。以上より、ボタンかけと手指の巧緻性の関連が示唆されたといえる。

## 研究成果に関する今後の展開

研究1から研究4の成果より、今後の展開として次の2点が挙げられる。

### ①着脱の習得段階における衣服の形態と保育者の援助

着脱を習得段階の幼児は動作パターンが多岐に渡っており、試行しながら着脱を行う様子が観察された。保育者は幼児にとって難しい動作を理解した上で援助するとともに、様々な動作を習得させるために多様な形態の衣服を着用させることが重要であるといえる。

### ②ボタンかけと手指の巧緻性の関連性

ボタンかけが手指の巧緻性と関連することは、生活動作によっても手指の巧緻性を向上させる可能性があることを示したといえる。手指の巧緻性は児童期以降の学習活動にも関わる能力であり、幼児期より日常生活において手指を動かす機会を増やすことの重要性を示したと考える。